

河川空間における運動施設設置の留意点 —とくにマラソンコースとしての利用について—

Considerations in planning sports facilities in river zones —For use as marathon courses—

研究第二部 主任研究員 中川 邦雄
元研究第二部 主任研究員 金森 功
前研究第二部 主任研究員 金平 健司
研究第二部 次 長 田中 長光

近年、町興しの一環として、またスポーツの振興策として様々な規模のマラソン大会や歩こう会などが開催されて来ている。しかしながら、このような大会を開催するに当たっては、一般的に市街地の道路を使用するため、一般車両の通行止めや警備に多くの人手と費用が必要となる。

このような状況の下、河川に目を転じて見ると、そこには連続性と広がりを持った公共的空間があり、この河川の河川敷や堤防天端道路を利用した数々のスポーツイベントも開催されて来ている。

堤防天端上の通路をマラソンに利用する場合には、一般道路を使用するのとは比べて安全性については高い評価を受けていながらも、幅員が狭い、河川敷と堤防天端道路を結ぶ道路がZ型であり大勢が走れないなど走路に関する問題点も指摘されている。

また、設備や施設においても、トイレや水道設備及び駐車場が少ないことも指摘されている。このような問題点について、実体験を通して明らかにすると共に、マラソン指導者等へのヒアリング調査を実施し、河川空間がより一層活用されるための河川施設のあり方について明らかにし、マラソンのモデルコースを提案した。

なお、本稿は平成11～12年度「河川における運動施設の健康増進効果に関する実体験的研究（その1、その2）」及び平成13年度「河川空間における運動施設のモデル作成」の研究成果を平成14年度に取りまとめ報告するものである。

キーワード：河川空間、自然とのふれあい、マラソン大会、日常利用、運動施設

In recent years, marathons and walking events of various scales have been held as, for example, a means of boosting local economy or promoting sports. Such sporting events, however, usually requires the use of roads and streets, organizing those events takes a large staff and a considerable amount of money for controlling vehicle traffic and providing security.

Since rivers provide continuous, invaluable public spaces, it has become increasingly common to hold various sporting events on a high water bed of a river or on roads on top of levees.

Although river zones are generally considered to be safer than ordinary roads, a number of problems have been pointed out, such as the existence of narrow slopeways connecting high water riverbeds and crest roads, both of which prevent many runners from passing at the same time.

There are also many complaints about the inadequacy of equipment and facilities, such as insufficient numbers of toilets, water supply facilities and parking spaces. The authors identified these problems on the basis of empirical data to solve these problems, the authors attempted to identify problems through experience, and, by conducting interviews with marathon coaches and other people concerned, determined what river facilities should be like if river zones are to be put to greater use, and proposed a marathon model course.

This paper, prepared in fiscal 2002, puts together the results of a two-part study conducted in fiscal 1999 to 2000 (An Empirical Study on the Health-promoting Effect of Sports Facilities in River Zones, Part 1 and Part 2) and another study conducted in 2001 (Modeling of Sports Facilities in River Zones).

Key words : river zone, contact with nature, marathon, daily use, sports facilities

1. はじめに

近年、町興しの一環として、またスポーツの振興策として様々な規模のマラソン大会や歩こう会などが開催されて来ている。しかしながら、このような大会を開催するに当たっては、一般的に市街地の道路を使用するため、一般車両の通行止めや警備に多くの人手と費用が必要となる。このため、地方財政が困難な折、縮小の傾向にある。

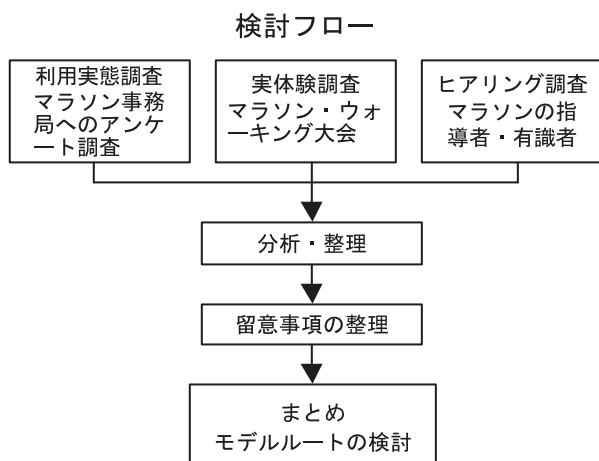
このような状況の下、市街地の道路から河川に目を転じてみると、そこには公共的で、広がりや連続性を持った貴重な河川空間が存在している。また、現在ではこの河川空間を活用しての「自然とふれあいながら」数々のスポーツイベントも開催されて来ている。

本研究では、このスポーツイベントの中からマラソンを対象に河川敷利用の体験調査等に基づき利用面の問題点を抽出した。また、マラソンの指導者や大会関係者へ問題点の改善等ヒアリング調査を実施し、「マラソンコースとしての利用」及び「日常的な利用」の両面から、より一層活用されるための河川施設整備のあり方について検討した。さらに、検討結果を基にマラソンコースについてモデルルートを提案した。

2. 検討フロー

平成11年度及び12年度においては、利用実態調査、実体験調査及びヒアリング調査を実施した。

平成13年度は、これまでの調査結果を基に河川施設整備に当たっての留意事項として整理しマラソンコースのモデルルートを提案した。



3. 利用実態調査等

マラソン大会事務局のアンケート、マラソン指導者・有識者へのヒアリング調査及び実体験調査により以下の3つの観点から整理分析を行った。

①走路（走行区域）②施設・設備 ③運営・管理

3-1 マラソン事務局アンケート

実際に行われているマラソン大会事務局143ヶ所によるアンケート結果は以下のとおりである。

① 走路（走行区域）

走行区域	河川敷低地と堤防天端を使用
ルート設定	往路・復路の同一ルート。コースに変化を持たせる工夫をしている
コース幅	6 m 未満が多い
道路との交差	一般道路との交差はない
距離表示	なし（あったほうがよい）

② 施設・設備

既存施設	トイレ、駐車場、更衣施設
仮設で対応	受付場、更衣施設、トイレ
給水所	2～3ヶ所
必ず必要	更衣施設、水道、トイレ、駐車場

③ 運営・管理

運営人員	ボランティアの協力による運営
安全性	一般道路に比べ安全性は高い

3-2 マラソン指導者・有識者へのヒアリング

指導者や有識者の立場から見て、河川敷をマラソン大会として利用する場合の意見と不満点を以下にまとめた。なお、指導を頂いた先生は、東海大学教授宇佐美彰郎氏、順天堂大学教授沢木啓祐氏及び玉川大学陸上部コーチ三井純一氏の三氏である。

意 見	不満点
①走路（走行区域） ・都市近郊のマラソン大会コースとして適している ・舗装はアスファルトや土が良い ・正確な距離表示が必要 ・適度なアップダウンは良い	・コースに変化をつけるのは困難（単調になり易い） ・幅員が狭い ・水たまりがある
②施設・設備 ・トイレ、シャワー、水道、更衣施設、荷物預かり、広場が必要 ・木陰はあった方がよい	・施設・設備が不足している
③ 運営・管理 ・交通整理が容易 ・安全性は一般道路に比べ高い	・救急車の移動が迅速に行えるか疑問

3-3 実体験調査

体験から得られる問題点を整理するため、実際の河川敷で開催されるマラソン大会に平成11及び12年度に

各々2回参加した。参加した大会名称及び問題点を以下に整理する。

体験コース

調査年度	大会名称	距離(km)	参加費	走行距離
11	荒川市民マラソン大会	3、10 フルマラソン	4,000	河川敷の低地、 一部堤防天端
11	長島リバーサイドマラソン大会	5、10、16	3,000	堤防天端の内と外 天端は狭い
12	筑後川久留米ファミリーマラソン	1、1.5、2、 2.5、3、3.5、 10、20	3,000	河川敷の低地
12	大井川「リパティ」マラソン	3、5 ハーフマラソン	2,000	河川敷道路を使用

(実体験は当時、研究第2部の神保廣光、滝浪善裕及び金森功の主任研究員3名によって行われた。)

問題点等の整理

区分	問題点等
走路・走行区域	- 走路幅員は一般的に4m程度、大規模な大会では6m程度は必要 - 直線距離が長く続くのは単調であり好ましくない、アップダウン等縦方向の変化を持たせる工夫が必要 - 橋梁部等での連続性の確保と急カーブの解消 - 距離表示の不足
施設・設備	- トイレ、水道、駐車場、更衣施設の不足 - 木陰は絶対に必要 - ウォーミングアップ、表彰等ができる広さの広場が必要 - 施設等がない場合は会場周辺の施設の借用を検討して準備する
運営・管理	- 緊急車両が速やかに移動できる走路の確保 - 走路、施設等の良好な維持管理 - 大会開催時には地域の方々の協力が必要 - 一般の方が応援に来られるような構図が望ましい

4. 留意事項の整理

利用の実態調査、マラソン指導者等へのヒアリング調査ならびに実体験調査をととして、整理分析を行い河川敷における整備の留意事項として

- ① マ)：マラソン(大会)コースとして整備する場合
- ② 日)：日常利用を促進する場合

の2面から整理した。

なお、整理の方法は下表のとおり3つの観点に区分し、「留意点」、「整備内容⇒解説」及び「注意事項」としてまとめた。

整理・分析項目

4-1 走路(走行区域) (1) 走行区域・形状(変化状況) (2) 堤防天端道路と河川敷道路との移行部 (3) 道路や橋との交差部 (4) 舗装 (5) コース幅 (6) 距離表示 (7) スタート・ゴール地点	4-2 施設・設備 (1) スタート・ゴール広場 (2) トイレ (3) 水道・給水施設 (4) 更衣室 (5) 荷物預かり所・貴重品預かり所 (6) 駐車場 (7) 木陰(休憩施設) (8) 観覧・応援席
4-3 運営・管理 (1) 安全性 (2) 交通整理 (3) 制限時間	



スタートの様子・大井川

4-1 走路(走行区域)

(1) 走行区域・形状

留意点

マ) 単調なコースとなることを避けるため、コースに変化を持たせる
 日)、マ)「自然とのふれあい」を考慮したコース設定をする

整備内容⇒解説

マ) 河川管理用道路、緊急用河川敷道路及びサイクリングロード等の既存施設を活用したコース設定をする
 ⇒現在ある施設を有効活用する
 マ) 堤防天端道路と河川敷道路を併用することにより、コースに高低差を持たせる
 ⇒天端と河川敷を坂路によって結び、コースにアップダウンをつけ、単調さを軽減する
 マ) 河川敷道路は左右方向に変化を持たせる
 ⇒走路を堤内側から水辺付近へと変化させる

- マ) 既設の公園や広場の園路を活用する
⇒園路を一部走路として共用することにより、走路に
変化がつけやすい
- マ)、日) 自然を感じることで、「自然とのふれあい」
を考慮したコース設定をする
⇒視覚(水の流れ)、聴覚(水の流れの音)、臭覚(水
の香り)、触覚(吹き抜ける風)等、川の流れを身
体全体で感じることで水辺付近を走路に設定
する。また、川畔林の林間を抜ける走路も考えられ
る
- マ) 走路脇を植栽することでコースにアクセントをつける
⇒走路と他区域との境界となりコースの景観的ポイントとなる
- マ) 往路、復路として設定する場合、別ルートとするのが
望ましい
⇒折り返し地点による同一コースの往路は、変化が少
なくなるため、河川敷に2本以上の走路を設定する
か、堤防天端道路と河川敷道路で使い分けるなど、
極力別ルートにする

注意事項

- ・植栽については、「河川区域内における樹木の伐採・植
樹基準」に照らして行う
⇒現存する樹木を活用したコース設定を行う
- ・堤防天端と河川敷とを結ぶ坂路については、河川上流方
向に下降する「逆坂路」となる部分もありうる
⇒坂路形状や勾配に注意し、整備する「(2) 堤防天端
道路と河川敷道路との移行部(坂路)」参照
- ・対岸ヘルート変更する場合も考えられるが、その場合は
橋を渡る際に一般交通との接点ができる
⇒交通整理・規制の必要が生じ、管理・運営での対策が
必要となる

(2) 堤防天端道路と河川敷道路との移行部(坂路)

留意点

- マ) 走行時の急な方向転換を避け、走りやすさを心がける

整備内容⇒解説

- マ) 堤防天端道路と河川敷道路の接続部がZ型となっ
ている部分は改修を行う
⇒坂路については、河川上流方向に下降する「逆坂路」
形状となることも含めて整備する
- マ) 走行方向に配慮した坂路の整備を行う
⇒坂路については堤防天端から下流方向に下降する場
合が多いが、その場合、急な方向転換を強いられる。
そのため、マラソンの流れを遮断しないよう、一定方
向にルートを整備する
- マ) 坂路の勾配を緩固くする
⇒急なアップダウンはランナーへの負担が大きいた
め、5%程度の勾配とする
- マ) 急カーブは避ける
⇒進路方向の大きな変化がある場合、大きく緩やかな
線形とする

注意事項

- ・「逆坂路」とする場合、洪水時において坂路からの越流
の可能性がある
⇒越流対策として、坂路への流れ込む流速を低減させ
るよう、上流側の堤防幅を広げることで流速の低減
を図る
⇒河道が湾曲している箇所では、流速が低く水の勢いが
弱い内側の堤防を利用して整備する



堤防天端から河川敷への逆坂路(下流方向を望む)
※下流部より上流側の堤防が広がっている・多摩川

(3) 道路や橋との交差点部

留意点

- マ) 一般交通との交差点をなくす

整備内容⇒解説

- マ) 一般道と走路の交差点をなくす
⇒交差している場合、交通規制や、安全面の確保等の
配慮が必要である。また、道路横断時にマラソンを
遮断する場合も発生し好ましくない
- マ) 橋との交差点においては、河川敷道路を利用し、走路
を連続させる
⇒架橋部分では、河川敷に走路を設定し、橋梁の下部
を通過する形態をとる
- マ) 走路については、走者専用とする
⇒安全性の確保のため、走路については、車両止めを
設置し、車両の乗り入れを禁止する

注意事項

- ・橋梁の下部及び周辺は未整備区域(保護区域)となっ
ているため、走路として利用できるよう整備が必要である



橋梁の下を通る走路・多摩川

(4) 舗装

留意点

マ)、日) 走りやすい舗装ということに重点を置く

整備内容⇒解説

- マ)、日) ウレタン舗装が望ましい
⇒足腰への負担が軽減され、最も適している
- マ)、日) アスファルト舗装とした場合、透水性を持たせる
⇒透水性とし、水たまりがでるのを防ぐ
- マ)、日) 土を用いる場合、表面の凸凹や土埃に十分配慮する
- マ)、日) 排水機能を設ける
⇒コース脇に排水溝を整備する。透水性舗装とする
- マ)、日) 往路、復路が同一ルートの間には、センターラインを引くなどスムーズな走行に配慮する

注意事項

- ・堤防天端道路等の車両通行が多い区間のウレタン舗装は、輪荷重が大きく車両通行に適さない
⇒走路全体をウレタン舗装とするのではなく、半分程度の幅とし、残はアスファルト舗装とする
- ・走路を土とする場合、整地や土埃対策等の管理面において負担が大きくなる
- ・コンクリート舗装はその硬さから足への負担が大きく、マラソンには適さない

(5) コース幅

留意点

マ) 大会時の混雑に対応できる幅員を確保する

整備内容⇒解説

- マ) 6m 程度確保する
⇒往路復路が同一ルートの場合は6m 確保する

注意事項

- ・十分な幅員を確保できない区間は、コースの混雑を回避するために往路・復路を別にする



十分な舗装幅(ウレタン・アスファルト舗装)・大井川

(6) 距離表示

留意点

マ)、日) 正確な距離表示を設置する

整備内容⇒解説

- マ)、日) 正確な距離表示を1Km 間隔で設置する
⇒大会時・日常時に関わらず、ジョギングの際の目安になる
- マ)、日) 大きさは通常時に邪魔にならない程度の小規模なものとする
⇒走路脇に小規模の看板を設置する
- マ)、日) 舗装面にライン等による距離表示をする
⇒ラインを引く、舗装面の色を変化させるなど、目印となるよう舗装する
- 日) スタート・ゴールラインを舗装面に表示する
⇒日常のジョギングの際に目安となる

注意事項

- ・表示間隔は正確なものとする
- ・走行の邪魔にならないようにする



大会時の距離表示・大井川

(7) スタート・ゴール地点

留意点

マ) 大会時の混雑に対応できるスタート・ゴール地点を整備する

整備内容⇒解説

- マ) スタート・ゴールより100m 区間についてはコース幅(6m) より倍の幅員を確保する
⇒大会時には、多数のランナーが集中するため十分なスペースを確保する
- マ) スタート・ゴール地点に隣接して施設を整備する(スタート・ゴール広場参照)

4-2 施設・設備

(1) スタート・ゴール広場

留意点

マ) スタート・ゴール地点に隣接して広場を整備する

整備内容⇒解説

- マ) 大会時の開会・閉会式等多くの参加者が集合可能なよう広場を整備する
⇒60m×60m 程度のスペースを確保する
(3,000人規模、1m²/人)
- マ) 走行前にウォーミングアップができるスペースを確保する
⇒芝生広場が利用しやすい
- マ) 大会参加者外でも、休息がとれる広場が良い
⇒芝生広場が利用しやすい
- マ) 大会時のスタート・ゴール広場には、利便施設の整備・拡充を図る

注意事項

- ・広い広場の確保が困難な場合、既存河川敷広場や河川敷陸上競技場等がある箇所に設定する



スタート地点・荒川

(2) トイレ

留意点

- マ) スタート・ゴール広場及びコース途中にトイレを整備・設置する
- 日) 公園・広場及びコース途中にトイレを整備・設置する
- 日) 既設トイレの位置の情報を提供する

整備内容⇒解説

- マ)、日) スタート、ゴール広場に常設整備する
⇒常設トイレは日常時においても利用可能とする
- マ) 大会時には十分な数を確保するために仮設トイレを増設する
⇒仮設が容易にできるようにコース脇にスペース及び土台(基礎)を整備しておく。女性専用トイレを設けられるとなお良い
⇒コース途中の仮設トイレは2.5km 間隔とする
- マ)、日) トイレの位置を明確にするため、走路にサインを設ける、又は看板で情報を提供する
⇒走路から見て設置位置の方向を示す
(ex. WC →)

注意事項

- ・多数設置を行う場合、配置位置に留意する



大会時の仮設トイレ・荒川

(3) 水道・給水施設

留意点

- マ) スタート・ゴール広場及びコース途中に水道・給水施設を整備・設置する
- 日) 公園・広場及びコース途中に水道・給水施設を整備・設置する
- 日) 既設水道・給水施設の位置情報を提供する

整備内容⇒解説

- マ)、日) 水道はスタート・ゴール広場に常設整備する
⇒常設水道は日常時でも利用可能とする
- マ) 大会時にはコース途中に給水施設を仮設する
⇒仮設テント及びテーブルが容易に設置できるようにコース脇にスペース及び土台(基礎)を整備しておく
⇒設置間隔は2.5~3.0km 毎に設置可能な整備をする
- マ) スタート・ゴール地点に給水施設を仮設する
⇒ゴール後の水分補給のため設置
- マ) 大会時には参加者が競技終了後に利用できるよう仮設シャワーを設置する
⇒仮設シャワーが容易に設置できるよう広場内に土台(基礎)を整備しておく
- 日) 既設園地の水道が利用しやすいよう走路にサインを設ける、又は看板で情報を提供する
⇒水道が利用しやすいよう走路から見た水道の位置を示す(ex. 水道 →)

(4) 更衣室

留意点

- マ) スタート・ゴール広場に更衣室を整備・設置する

整備内容⇒解説

- マ) スタート・ゴール広場に仮設 TENT を設置する
 ⇒大会時には十分な数を確保する
 ⇒仮設が容易にできるよう広場内にスペース及び土台(基礎)を整備しておく
 ⇒雨天時を想定したものが見ましい

注意事項

- ・多数設置を行う場合、設置位置に留意する

(5) 荷物預かり所・貴重品預かり所**留意点**

- マ) スタート・ゴール広場に荷物預かり所・貴重品預かり所を整備・設置する

整備内容⇒解説

- マ) スタート・ゴール広場に仮設 TENT を設置する
 ⇒仮設 TENT、テーブルが容易に設置できるように、広場内にスペース及び土台(基礎)を整備しておく
 マ) 四阿をスタート・ゴール広場に常設整備し、活用する
 ⇒日常時には休憩施設として利用可能な四阿を整備し、大会時には荷物預かり所や貴重品預かり所として活用する

注意事項

- ・多数設置を行う場合、配置位置に留意する

(6) 駐車場**留意点**

- マ) スタート・ゴール広場に隣接して駐車場を整備する

整備内容⇒解説

- マ)、日) 河川敷に駐車場を整備し、大会時はもちろん日常時においても利用可能とする
 ⇒通常時は広場として利用している区域を、大会時には臨時駐車場として使用する
 ⇒(試算) 3,000人参加の大会規模。うち自動車での来場者を30%、1台あたり2人乗車とし、1台あたりの駐車スペースを25m²とすると、必要な全体スペースは以下になる

$$3,000人 \times 30\% \div 2人 \times 25m^2 = 11,250m^2$$

 マ) 大会時は日常時より多くの駐車スペースを必要とするため、駐車可能な広場も整備する
 ⇒既存の広場を臨時駐車場として活用する

注意事項

- ・駐車場や駐車スペース(広場)へは、乗り入れを可能にしておく(堤防坂路の整備)
 ・駐車スペースを予定している区域については車両の乗り入れに対応した舗装を行う

(7) 木陰(休憩施設)**留意点**

- マ)、日) 晴天時、夏季の気温上昇対策のためにコース中に木陰を確保する

整備内容⇒解説

- マ)、日) コース脇に高木を植栽し木陰を形成する
 ⇒木陰が多い樹幹幅のある木を選定する(コナラ、ケヤキ、サクラ等)
 マ)、日) 河川敷に林が現存する場合、それを活用したコース設定を行う
 ⇒通常時にも休憩場所としての利用を可能とし、ベンチを併設するのも良い
 日) 四阿を設置する(既存の施設を利用する)
 ⇒走路付近に四阿を整備し休憩施設として利用する(既存施設を活用した走路をとる)

注意事項

- マ)、日) 植栽は「河川区域内における樹木の伐採・植樹基準」に照らして行う必要がある
 マ)、日) 植樹による温度低減効果の代替案として以下がある
 ・走路を河川付近に整備する
 ・走路の風通しをよくするため、走路に50cm程度の盛土を行う
 ・舗装の照り返しによる温度上昇を軽減させるため、走路以外の舗装は照り返しの少ない芝生等による整備とする



林の横を抜ける走路・多摩川

(8) 観覧・応援席

留意点

マ) 観覧・応援席を整備する

整備内容⇒解説

- マ) 家族連れや観覧者のため、ベンチ等をスタート・ゴール広場に整備する
- マ) スタート・ゴール広場やコース途中の堤防の一部を階段状に整備しベンチに利用する

注意事項

マ) 大量のベンチの整備が困難な時は応援・観覧者が座れるように芝生等の広場を確保する

4-3 運営・管理

(1) 安全性

留意点

- マ)、日) 一般交通との交差点をなくし安全性を高める
- マ) 緊急時の車両のスムーズな通行を確保する

整備内容⇒解説

- マ)、日) 一般道と走路の交差点をなくす
⇒交差している場合、道路横断時の危険度が増す。また、マラソン大会時には交通整理等に関わる人員の削減につながる
- マ) 交差点でマラソンの連続性が遮断される
- マ)、日) 走路については走者専用とする
⇒安全性の確保のため、走路は走者専用とし車止めを設置する、ただし緊急時には堤防天端道路の通行が可能なよう配慮をする

(2) 交通整理

留意点

マ) 交通整理用の人員を確保する

整備内容⇒解説

- マ) 河川空間の利用を基本とするため、多数確保する必要はないが、コースの変化点（天端道路と河川敷道路の移行地点、折り返し地点等）に配置し、スムーズな進行を補助する
- マ) 一般部との交差点がある場合、一時的に交通規制を行い対応する

注意事項

マ) ボランティア等による運営補助も検討する

(3) 制限時間

留意点

マ) 制限時間を設定し他利用との交錯に留意する

整備内容⇒解説

- マ) 走行距離に応じて参加者全員が完走できる時間を設定する
⇒10km：1.5h、ハーフマラソン：3h、フルマラソン：7h程度
- マ) 河川敷における他施設の利用を妨げないようにする

5. モデルルートの提案

前項の留意事項をふまえ、モデルケースとして多摩川を例にとり下記に示す2ルートについてマラソンコース（ルート）を巻末に提案する

A ルート（右岸）

堤防天端道路（管理用道路）や河川敷道路（緊急用河川敷道路）の既設道路を活用したルート

B ルート（左岸）

堤防天端道路（管理用道路）や河川敷道路（既存の散策路、緊急用河川敷道路）といった既存道路を活用し、一部に新整備道路を交えたルート

ルート図の構成

- コース全体図：A、B ルート全体図（いずれもフルマラソンが対応可能なように距離を設定した）
- スタート・ゴール地点：陸上トラックが整備されている既設公園を利用して設定した
- 折り返し地点：既設公園、陸上トラックが整備されている既設公園を利用して設定した

6. おわりに

本研究をととして、大会参加者の家族や応援の人等大勢の人とふれ合いながら河川の持つ自然のすばらしさを実感することができました。

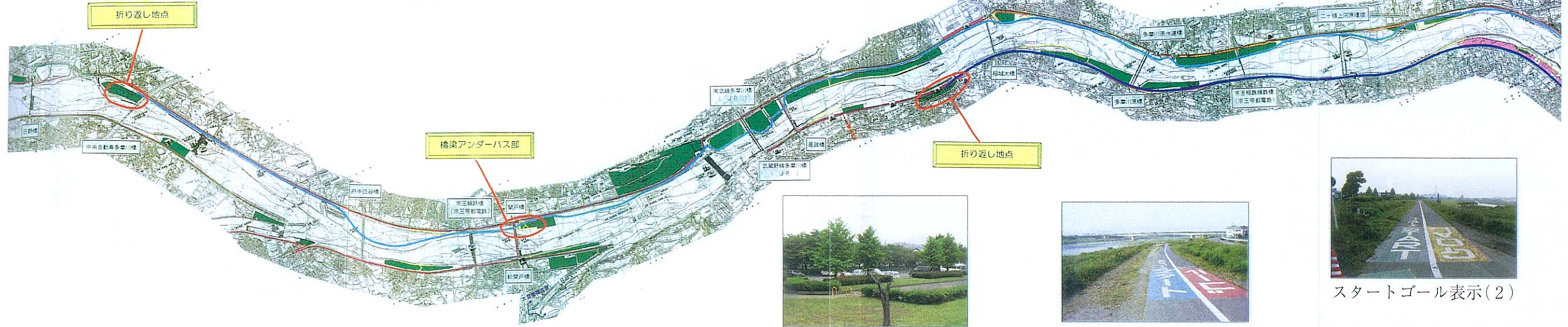
研究の成果を大いに活用して頂き、河川空間をより身近な生活空間として取り込み、健康増進に寄与することを期待いたします。

なお本検討を進めるにあたりご協力を頂いた関係各位に対してお礼申し上げます。

＜参考文献＞

- 1) 財) リバーフロント整備センター：河川における運動施設の健康増進効果に関する実体験的研究（その1、その2）（H12年3月、H13年3月）
- 2) 財) リバーフロント整備センター：河川空間における運動施設のモデル作成（H14年3月）

コース 全体図 (フルマラソン対応)



休憩施設 (四阿)



コース脇の林



コース脇の駐車場



スタートゴール表示(1)



スタートゴール表示(2)



木陰



アンダーパス (道路)



トイレ表示



距離表示



走路と走路脇の植栽



アンダーパス (鉄道)



陸上トラックと走路の接続部

- ＜国土交通省の収養・提供システム＞
- 水質自動監視装置
- 水質自動監視装置
- ＜河川管理施設＞
- 堰
- 堰止
- 水門
- 堰門
- 管理用道路
- ＜占有許可施設＞
- 許可工作物
- 占有地（公有地（国庫地））
- サイクリングロード
- ＜治水・基盤対策に係る施設＞
- 水防施設
- ＜危険管理対策に係る施設＞
- 緊急用避難場
- 緊急用河川敷道路
- ＜情報システム＞
- 光ファイバ
- インフォメーションセンター
- ＜治水施設＞
- 河川浄化施設
- ＜人と川のふれあいに係る施設＞
- 岸辺の散策路
- ※ 水洗トイレ（障害者用を含む）
- ＜福祉関連施設＞
- 福祉用道路（スロープ）
- ＜自然環境の保全に係る施設＞
- ※ 食糧
- ※ ワンド
- ＜その他＞
- 主な民営地

※国土交通省が施設管理する施設のみを表示しています。